

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」



フィクション劇場 第二十九話  
「サポーター」

大太  
大

【はじめに】

○「フィクション劇場」作者の大太 大（お  
おた・だい）と申します。つたない作品  
にご興味を持って頂き、ありがとうございます  
います。

【フィクション劇場とは】

○作者が世の中で違和感を感じている出来事  
や疑問に思っていることなどに対して、  
「もし、こういう設定や条件になった  
ら、当事者たちはどう動くのか」を考え  
た「性根の曲がった社会派オムニバスド  
ラマ」です。フィルムバイヤーで第二十  
八話まで公開中、それらと同様に著作権  
完全フリーです。詳細は、まとめて公開  
している第一話〜第二十七話のイントロ  
をご覧ください。X（旧Twitter）も  
やっていますので、そちらも是非。

[https://x.com/ota\\_daidai](https://x.com/ota_daidai)

それでは、本編をどうぞ。

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

【あらすじ】

サッカーリーグ三部所属の雅々館（ががたて）FCのファンである、瀬戸和正、和正の息子の和也、大口スポンサー緑川繊維工業社長の息子・緑川茂樹、居酒屋経営の梶田文雄の四名は日本一やさしいサポーターを目指し、サポーターチーム「ギャラント・シーズ（Galant This ves（勇敢な泥棒たち…略称GT）」を結成する。しかし、メンバーは集まらず、観客に募金を募り、選手にミネラルウォーターの差し入れをするに留まっていた。

これを打開するため、和也を除く三人は、クラブ社長の森山達郎に、あるアメフトチームに倣って、個人単位での「公募増資」を行うことを提案する。森山と同会長の館林弘は、これに理解を示すも、個人株主が増えて、現在のスポンサー企業の出資比率が下がることに懸念を示す。しかし、和正は黄金株を発行することで払拭できると説得

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

する。結果、取締役会で増資が承認され、クラブ経理部長の緒方実が担当となる。

緒方は、個人情報を扱う観点から、三人には主に宣伝活動をお願いしたいと伝えて活動を始めたが、購入株は議決権のみで優待等はなく、一般市民やGT以外のファンは購入に消極的だった。しかし、クラブ生え抜きのFW小野寺誠や同GK貴島隆が宣伝に協力し、次第に活動が広がっていく。

そして十五年後、GTは客席を埋めるほどになり、クラブは力をつけ、一部昇格をかけた大一番に挑む。ベテランとなった小野寺と貴島は奮起し、小野寺の決勝点で昇格を決める。クラブ社長となっていた和正は、自社を継いだ緑川と共に勝利を見届ける。

一方、GTのリーダーとなっていた和也は初めて観戦に来た杉村孝と息子の浩人に丁寧に接し、浩人にまた観戦に来て欲しいと話す。浩人は和也の言葉に頷き、観客に挨拶に来た選手たちを見て、目を輝かせる。

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

【登場人物】

瀬戸 和正（せと・かずまさ）（35／50）  
：主人公。雅々館（ががたて）FCサポーターチーム「ギャラント・シーズ（GTL）」リーダー。現・雅々館FC社長

緑川 茂樹（みどりかわ・しげき）…（33／48）：GTメンバー。現・（株）緑川繊維工業社長、兼雅々館FC社外取締役

梶田 文男（かじた・ふみお）（34／49）  
：居酒屋「GIZOKU」店主。元GTメンバー

瀬戸 和也（せと・かずや）（12／27）  
：和正の長男。現・GTリーダー

岡村 貴文（おかむら・たかふみ）（45／60）  
：雅々館FC監督。現・雅々館FC会長

館林 弘（たてばやし・ひろむ）（65）  
：雅々館FC会長（当時）

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

森山 達郎（もりやま・たつろう）（58）：  
雅々館FC社長（当時）

古谷 勉（ふるや・つとむ）（43）：雅々館

FC監督

小野寺 誠（おのでら・まこと）（17／3

2）：雅々館FCフォワード

貴島 隆（きじま・たかし）（19／34）：

雅々館FCゴールキーパー

緒方 実（おがた・みのる）（43）：雅々館

FC経理部長（当時）

伊藤 みき（28／43）：雅々館FC職員

木崎 博一（きざき・ひろかず）（32／4

7）：雅々館FC職員

佐倉 幹夫（さくら・みきお）（50）：雅々

館FC施設部長

杉村 孝（すぎむら・たかし）（38）：観客

杉村 浩人（すぎむら・ひろと）（10）：観

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

客

観客 1 ～ 4

G T メンバー 1 ～ 8

雅々館 F C メンバー (当時)

雅々館 F C メンバー (現在)

F C 桐山メンバー (対戦相手・現在)

G T メンバー (モブ)

観客 (モブ)

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

○動画サイトの画面（全画面）

ガラガラのスタジアム観客席に立つ四人。

中央に瀬戸和正（35）と息子の和也（7）、向かって左に太鼓を下に置いて

た梶田文男（33）、右にギャラン

ト・シーブズの旗を広げて持っている

緑川茂樹（33）。

四人とも雅々館FCのレプリカ・ユニフォーム姿。和正と和也は腕に黄色のキャプテンマーク。

和正「みなさん、こんにちは！ 私たちはサッカー三部リーグの雅々館FCを応援している、瀬戸和正です！」

緑川「緑川茂樹です！」

梶田「梶田文男です！」

和正、和也の頭をポンポンと叩き、

和正「そして、私の息子の和也です！」

和正「私たち四人は、日本一やさしいサポーターを目指し、雅々館FCのサポーターチ

ーム『ギャラント・シーズ（Galiant Thieves）』を結成しました」  
緑川「『ギャラント・シーズ』とは、『勇敢な泥棒たち』。略称は『GT』。『“が”が“た”て』と同じです！」

梶田「選手と共に戦おうという気持ちで名付きました！」

和正「雅々館FCを応援する方なら誰でも参加出来ます！ 私たちとリーグ一部への昇格を目指して、一緒にチームを盛り上げて行きましょう！」

ドラムを叩く梶田。

旗を振る緑川。

ドラムに合わせて、手を前に出し、

♪「We are GT！」

手拍子「パン・パン・パン」

を繰り返す、瀬戸親子。

○喫茶店（同・昼）

スマホで動画を見ている、和正、緑

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

川、梶田の三人。

動画の下に「三ヶ月前、47回再生」  
の文字。

三人「はあゝ」

手を頭の後に置いて、仰け反る三人。

緑川「全然、伸びてねえな……」

梶田「和正、お前のところに連絡あった

か？」

和正「入りたいって人がか？ 全然。試合の

時に声かけて、やっとこさ十人くらいって

とこだ」

緑川「やっぱ、梶田がいかついからみんな怖

がってるんじゃないのか？」

梶田「オレのせいにするじゃねえよ！」

和正「まあ、そんなにすぐには集まらないと

思っちゃいたが……。とにかくできること

をやるしかないか……」

三人「……」

○スタジアムの外（別の日の試合後・昼）

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

募金箱を持って立っている四人。

四人「選手へのサポートのために募金をお願いします！」

観客に繰り返しお願いする四人。

四人に近づいてくるが、梶田を見て怖がり、立ち去ろうとする観客1。

その横で、和也が募金箱を出して、

和也「募金をお願いします！」

観客1はにっこりとして、硬貨を募金箱に入れる。

和也「ありがとうございます！」

去っていく観客1を見る梶田。

梶田「……」

梶田、和正を見て、

梶田「和正。お前、オレをダシに使ってるんじゃないだろうな？」

和正、とぼけて、

和正「知らねーよ」

募金を続ける四人。

○雅々館FC事務所（二階建てのビル全景・  
昼）

宅配業者の二トントラックが止まる。

呼び鈴を鳴らす運転手。

伊藤みき（28）（声）「はい」

運転手「お荷物です」

伊藤（声）「はい。伺います」

階段を降りていく伊藤。

運転手、ミネラルウォーターの入った

ダンボール箱を四つ置く。

伊藤「ありがとうございました」

伊藤にお辞儀をして、トラックに乗っ

て立ち去る運転手。

事務所の二階に上がる伊藤。

伊藤「木崎さん、荷物上げるの手伝ってもら

えますか？」

木崎博一（32）「いつものヤツか？」

伊藤「はい」

木崎「分かった」

ミネラルウォーターの箱を事務所二階

に運んでいく木崎と伊藤。

木崎、手を腰にやりながら、

木崎「ふう……」

木崎、伊藤を見て、

木崎「じゃあ、やるか」

伊藤「はい。赤で良かったですよね？」

木崎「ああ」

ダンボールからラベルレスのペットボトルを取り出す、木崎と伊藤。

○雅々館FCの試合（スタジアム・昼）

「ピー・ピー・ピー」と試合終了のフ

ォイッスル。

うなだれたり、手を腰にする雅々館F

Cの選手たち。

重い足取りで、三々五々ベンチに戻って、ベンチ前に置いてあるミネラルウォーターを手にする選手たち。

その中で、赤いテープの巻いてあるペットボトルのミネラルウォーターの取

り、頭にかけるフォワードの小野寺誠  
(17)。

それを見ている、監督の岡村貴文(4  
5)。

岡村「……」

岡村、選手全員を見ながら、

岡村「みんな、サポーターに挨拶しに行く  
ぞ」

選手たち「はい」

ホーム席に挨拶に向かう選手たち。

○ 雅々館 F C ロッカールーム (同・試合後)

椅子に座ってうなだれている選手た  
ち。

手をパンパンと叩く岡村。

岡村「よし、みんな頭を上げよう。試合には  
負けたが、得るものもあった。次の試合ま  
でにしっかり修正して臨もう。いいな」

頷く選手たち。

岡村、小野寺の方を向いて、

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

岡村「小野寺、お前はユースから上がったばかりだったから、まだ教えていなかったな」

顔を上げて、岡村を見る小野寺。

岡村「次から体にかけるのは青のテープの水にしてくれ。赤のは飲むためだけに使ってくれ」

小野寺「何ですか？ 監督」

岡村「赤の水はサポーターから飲むためにもらった差し入れだ。頭にかけたり、ボールにかけたりするものじゃない」

小野寺「……じゃあ、青の水は？」

岡村「ただの水道水だ」

小野寺「……」

岡村、貴島隆（19）の方を向いて、

岡村「貴島、お前も覚えておいてくれ」

貴島「分かりました、監督」

○喫茶店（数日後・昼）

テーブルを囲む和正、緑川、梶田。

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

緑川「なかなか調子上がねえな」

和正「ああ。ユースからフォワードの小野寺とキーパーの貴島が上がったけど、手っ取り早く他から補強しようにも金が無いんだだろうな。岡村監督も選手のやりくりが大変そうだ……」

梶田「和正よ。金の話だとすると、募金だけじゃあうちが開かないんじゃないかねえのか？」

和正「そうは言っても、オしらに出来ることはこのくらいだろ？」

梶田「でもお前、経済なんだろ？ 何かアイ

デアはねえのか？」

和正「オレは錬金術師じゃねえんだよ。簡単に稼げる方法なんてねえよ」

三人「……」

緑川、あくびをしながら、

緑川「なあ、和正。今日はもう帰っていいか？」

和正「何だよ、お前。もうか？」

緑川、目を擦りながら、

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

緑川「いや……、あんまり寝てなくてさ……」

和正「また、メジャーか？」

緑川「ああ。向こうはデーゲームだったからな」

和正「……まったく、お前もお前の親父さんもスポーツなら何でありだな。まあ、それでクラブのスポンサーになってくれてるっていうのはありがたいんだが……」

梶田「緑川、アメリカとかはスポーツでデカい金が動くんだろ？　そういうのでなんかないのか？」

緑川、手を頭の後ろに組んで、

緑川「ううん。どのスポーツも規模が違いすぎるし、選手のギャラも桁違いだし……。それに金持ちがチームのオーナーってのが多いからなあ……」

梶田「金持ちがオーナーねえ。近場にそんなの居ねえしなあ……」

三人「……」

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

緑川、腕を解いて、

緑川「あっ……、オーナーって言えば……」

和正「何かあるのか？」

緑川「……ある」

緑川、口に手をやって、

緑川「でも……」

和正「とにかく聞かせろよ」

三人は顔を突き合わす。

X X X

梶田「へえ、そういうのがあるんだ」

緑川「でも始まったのは百年以上前だ。最近

でも時々やってはいるみたいだけど……。

それに、日本でそのまま出来るかどうかも

分からないし……」

和正「詳しく教えてくれよ。オレが考えてみる」

緑川「でも、ウチらだけで動くって訳にもい  
かないぜ？」

和正「それも含めてだ。やらないで後悔する  
より、やって後悔した方がいい。ダメ元

だ。このままじゃ何も変わらないだろ？」

緑川「…：分かった。参考になるかどうか分からないけど本がある。英語だけど…：」

和正「貸してくれ。まとまったら、二人の意見聞かせてくれ」

頷く、緑川と梶田。

○雅々館F.C事務所（数日後・全景・昼）

事務所を見上げる背広姿の和正、緑

川、梶田。

梶田を見る和正。

緑川「お前、グラサンかけたらマフィアみたいだな」

梶田「そういう言い方すんな！ 慣れてねえんだよ。せめてSPとか言えよ」

緑川「でも和正、何もこんな格好しなくても…：」

和正「きちんとした話をしに来たんだ。サンダル履きって訳にも行かないだろ」

ネクタイを締め直す和正。

和正「じゃあ行くぞ」

事務所内に入っていく三人。

○事務所内・応接室前（同）

伊藤に先導されて歩く三人。

伊藤「こちらです」

ドアに「応接室」の文字。

止まって見つめる三人。

三人「……」

和正がドアをノックして開ける。

和正「失礼します！」

緑川・梶田「失礼します！」

和正を先頭に部屋に入る。

○同・応接室（同）

部屋の机に座っている会長の館林弘

と、その前のソファに座っている社長

の森山達郎。

森山、立ち上がって、

森山「みなさん、よくいらっしやいました。」

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

どうぞお座り下さい」

和正・緑川・梶田「はい。失礼します」

**森山と三人、対面でソファに座る。**

森山「みなさんには、いつもウチのクラブを  
応援して下さいありがとうございます。

選手たちの力になっています」

和正「こちらこそ。そう言って頂けるのは嬉  
しいです」

森山「特に、緑川さんのところは大口のスポ  
ンサーとして、社外取締役にもなって頂い  
て」

緑川「いえ、親父も好きでやっていますか  
ら」

森山「それでも助かっています」

X X X

**森山、一呼吸置いて、**

森山「早速ですが、今日はお話があると伺っ  
ています。どのような内容でしょうか？」  
和正「はい。実はお願いがありました……」

X X X

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

森山「えっ？ 増資を手伝いたい……と？」

和正「はい」

森山「しかし、増資は基本的にクラブとスポンサー企業さんとの話になります。お気持ちはあるがたいのですが、みなさんが間に入るということは、ちょっと……」

和正「いえ、企業ではなく、個人での出資のお手伝いです」

森山「つまり……、個人株主を増やす、ということですか？」

和正「はい、そうです。『公募増資』という形になります」

森山「……」

森山を見る緑川と梶田。

緑川・梶田「……」

森山「こちらとしてもお金がある事に越したことはありませんが、しかし……、不特定多数の方の出資と言うのは……」

和正「海外でやっているチームがあると聞いています」

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

森山「……」

館林「アメフトチームことかね？」

森山、館林の方を向いて、

森山「会長……」

館林、立ち上がって、

館林「私も聞いたことがある。その事か

ね？」

ソファに向かって歩く館林。

和正「おっしゃる通りです」

お誕生日席に座る館林。

館林「しかし、あそこは完全な市民株主のチームのはずだ。だが、私どもには既にインサーさんが出資してくれている。頭を下げてお願いしているところがほとんどだ。それを向こうと同じにしたいから手を引いてくれ、という訳にもいかないのだが……」

和正「それは承知しています」

館林「それに、このリーグでもそういうことをしたクラブがあっただろうか？」

和正「はい。それも存じ上げています。ただ、その時は持株会という形でした。一時、その持株会が筆頭株主になったことも知っています。今は比率が下がっています。が……」

館林「私も詳しいことは知らないが、多分、持株会の比率が高いことに、他の出資企業が難色を示したようにも思えるが……」

和正「はい。私もそう思います」

館林「……」

森山「瀬戸さん。仮にこの話がうまくいったとしても、個人株主が増えて同じようなことにはなりませんか？」

和正「持株会は個人株主の集まりですが、議決に関しては会への一任の場合が多いです。しかし、純粋な個人株主ではそこまでの意見が一致しないでしょうから、そういうことは起きにくいかと……」

森山「しかし、買って頂けるのはサポーターのみなさんが主だと思います。自然と意見

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

が集約されそうですし……。それに、こういう言い方をするのは失礼ですが、クラブ運営の細かいところ、例えば選手の起用などの提案をされると困る部分があります」

館林「私もそう思う」

和正「それに関しては、会長さんに黄金株を持って頂くことにする、という形で如何でしようか？」

森山「黄金株？」

館林「一株で拒否権を行使できる株のことだね？」

和正「はい」

森山「瀬戸さん、これはクラブ側でもコンセンサスを取るのが難しいご提案だと思います。クラウドファンディングとか、そういうものならご協力出来そうですが……」

和正「はい。それも考えたのですが、クラウドファンディングはあくまで通常の資金調達のみを目的としたものです。20%程度の手数料が掛かりますし、それなりの返

礼も必要になります」

森山「今、ファンクラブでもチケット優待はしていただけますが、それ以上のものが必要だと？」

和正「いえ、優待の対象となる持ち株数を上げて、そういうものは出来るだけ少なくしたいと考えています」

森山「……と言うことは、株を買うためにお金をだして、後は何もなし、ということですか？」

和正「基本的にそうなります。株の購入代金の全てがクラブさんに入る形です」

森山、ソファーにもたれ掛かって、

森山「瀬戸さん、それは無理でしょう？　そうすると株券は、実質的にただの領収書と同じじゃあないですか？」

和正「はい。ただクラブを応援している、その証左となるだけです」

森山「……」

梶田「うちの店も少ないですけど、スポンサ

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

ーになっっています。クラブに強くなっても  
らえるなら……と、思っています」

森山「……」

館林「……緑川さんのところは、何と？」

緑川「まだ、父親には話はしていません。何  
も決まっていませので……。ただ、これ  
以上の出資は会社の体力を考えると難しい  
だろうな、という感じですよ。今でもワンマ  
ンなどところがありますので、これ以上とな  
ると……」

森山、館林を見て、

森山「どうしましょう？ 会長」

館林「……」

全員、館林を見て、

森山・三人「……」

館林「……確かに私どものホームタウンは大  
都市とは違う。人口で言えば15万人くら  
いだ。スポンサーになって頂けるところも  
大方お声がけはしている。これからの伸び  
代を考えると……」

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

館林、深く息をついて、

館林「とは言え……」

森山・三人「……」

和正「会長さん、私たちのサポーターチームもまだ力不足ですし、こういうお願いをすること自体、不躰だと思います。ただ、クラブを強くしたいという気持ちは同じだと思います。ご検討頂けませんでしょうか？

お願いします」

緑川・梶田「お願いします！」

館林「……」

森山「どうしましょうか……、会長……」

館林「……」

三人「……」

館林「……分かった。検討してみよう」

館林を見る森山。

表情が明るくなる三人。

館林「……しかし、黄金株のことも含めて難しい話になるだろう。ただ、大口スポンサーの責任者の方は、大体社外取締役に入っ

てくれているから、説明としてはしやす  
い。取締役会での承認が前提になるから  
な」

森山「しかし、会長。もし取締役会でゴーサ  
インが出たら、小口のスポンサーさんには  
どう対応されますか？」

館林「どちらにせよ、株主総会を開くことに  
なる。その時に丁寧にご説明するしかない  
だろう」

三人は頭を下げながら、

三人「ありがとうございます！」

館林「まだ、決まった訳ではない。結果につ  
いては、森山から別途知らせることにしよ  
う」

和正・緑川・梶田「はい！」

○和正の部屋（夜）

和正のスマホが鳴る。

電話に出る和正。

和正「はい、瀬戸です」

和正「はい！ OKですか！ ありがとうございます。ございます。はい。では次の日曜日には、はい。よろしくお願いします」

○ 雅々館 F C 会議室（日曜日・昼）

会議室には、雅々館 F C 経理部長の緒

方実（33）。

向い側には、和正、緑川、梶田。

緒方「経理部長の緒方と申します。お伝えしましたように、先日の臨時株主総会で、みなさんご提案の『公募増資』の実施が可決・承認されました。緑川さんの会社のプロジェクトも決め手になったと聞いています」

和正・梶田の方を向く緑川。

緑川「どうだ！」

梶田「別に、お前が偉い訳じゃねえだろ！」

緒方、苦笑いしながら、両手の手のひらを三人に向けて、

緒方「まあ、落ち着いて下さい」

和正「……で、緒方さん。今日のお話という

のは？」

緒方「はい。みなさんのご協力をどの範囲までにするか、というお話です。というよりどこまで可能かをお知らせする、と言った方がいいですね。後は作戦会議です」

和正「どこまで可能か、というのはどういうことですか？」

緒方「はい。株式購入には住所・氏名等が必要になります。それらは個人情報になりますので、みなさんからの直接購入は出来ないということですよ」

和正「そう言えば、その通りですね。では、私たちはどうすればいいのですか？」

緒方「主に、宣伝活動をお願いしたいのですが……」

和正「具体的には？」

緒方「ピラ配りとかネットでの呼びかけとか。もちろんクラブの者もお手伝いします」

緑川と梶田、身を乗り出して、

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

緑川「ウチの従業員に買わせませよ！」

梶田「ウチのお客さんにも！」

緒方「株主総会では、無理強いはしないようにして欲しいという意見もありました。ですので、控えめにお願いしますね」

顔を見合わず緑川と梶田。

緑川・梶田「……」

緒方「今、スポンサーになって頂いている企業さんには、そのあたりについてクラブから詳しい説明が必要になるかと思えますので、それはこちらで対応します」

和正「では、私たちでやれることは限られそうですねですか？」

緒方「その辺の知恵をお借りしたいのです。

何かアイデアはありますでしょうか？」

和正、緑川と梶田を見て、

和正「お前ら、何かあるか？」

緑川「うくん。試合のある日のスタジアムでの呼びかけとか……」

梶田「月並みっちゃ、月並みだなあ……」

和正「緒方さん、ユースの親御さんに買ってもらうというのはどうですか？ 自分たちのためでもありますし、トップチームのためでもありますから、アプローチしやすいかと……」

緒方「はい、それは考えています。ただ、その場合、親御さんの購入する株式の口数の多寡で、スタメンが決まるというような、そういう誤解を招かないようにする必要はあるかと思えます。子供たちはそういうのに敏感ですから。ですので、親御さんを集めて説明会を開こうと思っています。ですので、こちらで対応します」

緑川「子供たち、ということでしたら、中学・高校や大学にピラを置いてもらうというのはどうですか？」

緒方「一応、商売になりますので、常時置いてもらうのは難しいかと思えます。特に中学・高校では多分無理でしょう。学園祭や大学祭などのイベントで交渉次第、という

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

ことになりそうですね」

梶田「では、市のイベントとかはどうか？　ウチは焼き鳥とか飲食関係で出店させてもらうことが多いので。行けませんか？」

緒方「市との調整が必要になりますが、協力してもらえるかも知れません」

和正、緑川と梶田を見て、

和正「結局、オシたちで出来ることって、あんまりないなあ」

緒方「知恵をお借りすると言ってネガティブな話ばかりですいません。何分、こちらも初めての試みですから、慎重にならざるを得ないんです」

緑川「まあ、とりあえずスタジアムに来てくれるお客さんは脈ありな訳だし、ウチのチームの連中は、多分買ってくれるだろうし」

和正「ああ。そういうのが広がれば、うまく転がってくれる可能性もあるな」

和正、緒方を見て、

和正「ちなみに緒方さん、株を複数口買ってもいいのですか？」

緒方「かまいません。黄金株がありますし、小口が多いと思いますので。大きな口数の場合は、ご一報頂ければ」

緑川「複数口って言うても……。こりゃ、長丁場になりそうだな」

梶田「まあ、炭火焼きでじっくりってところか」

和正「梶田、お前んところガスだろ？」

梶田「うるせえ、例え話だよ！」

和正「とにかくOKが出たんだ。やってみるしかない」

頷く、緑川と梶田。

緒方「何かご不明な点がありましたら、必ずご連絡下さい。では、ご協力のほどお願いします」

和正・緑川・梶田「はい！」

○スタジアム（後日試合後・昼）

横断幕「雅々館FCを『自分たちの』  
クラブに育てよう！」

横断幕の横に、ピラを持った和正・緑  
川・梶田。

ピラを取る観客2。

三人、九十度お辞儀をして、

三人「よろしくお願いします！」

ピラを見ながら立ち去る観客2。

三人に近寄る観客3。

観客3「へえ、面白そうだな。何をすれば

いいの？」

緑川「クラブの株を買って欲しいんです」

観客3にピラを手渡す緑川。

ピラを見る観客3。

観客3「株？」

緑川「はい」

観客3「配当とかは、あるの？」

緑川「いいえ、ありません。ですが議決権は  
あります」

観客3「……チケット優待とか、そういうのは？」

緑川「それも……、ありません」

渋い顔をする観客3。

観客3「売り買いとかは？」

緑川「基本的に出来ないんです」

呆れる、観客3。

観客3「何だそりゃ？　こんなの株じゃないだろ」

ピラを捨てて、立ち去る観客3。

去っていく観客3を見る三人。

三人「……」

三人にユニフォーム姿で近づく小野寺と貴島。

びっくりする三人。

梶田「小野寺さんと貴島さんですか!？」

小野寺「ええ。GTの人？」

背筋を伸ばす三人。

梶田「は、はいそうです！」

小野寺「オレたちも手伝っていいかな？」

緑川「で、でも、試合終わりなんじゃあ…  
…」

貴島「そうだけど、これもクラブのためだっ  
て聞いている。いつも差し入れもらってる  
し。無理はしないから」

和正「あ、ありがとうございます！」

呼びかけをする三人と小野寺・貴島。  
寄ってくる子供連れの観客4。

ユニフォーム姿の観客4の子供にサイ  
ンをして写真を撮った後、観客4と話  
をする小野寺と貴島。

貴島は三人に手を向け、  
貴島「ウチのチームのために協力してもらっ  
ています。話だけでも聞いてもらえませ  
んか？」

三人の方に向かう観客4。

観客4に話をする三人。

観客4の子供「ねえ、お父さん。買ってあげ  
ようよ。お願い！」

子供を困った顔で見る観客4。

観客4「……」

三人を見る観客4。

観客4「購入の……、方法を教えて頂けませんか？」

三人、九十度のお辞儀で、

三人「ありがとうございます！」

声かけを続ける貴島と小野寺。

ピラを配る三人。

○ユースの親御さんへの説明会（別日・夜）  
（音無し）

クラブの会議室で、親御さん達の前に、説明している緒方と小野寺。

○市のイベント（別日・昼）

白いテントの下で、焼き鳥を焼く梶田。

その横で、ユニフォーム姿の貴島。

ピラを配る和正と緑川。

和正・緑川「クラブのために、ご協力お願い

します！」

イベント来場者がピラを取るたびに、  
九十度のお辞儀をする和正と緑川。

○試合後のスタジアム（後日・夜）

呼びかけが三人から、十人ほどに増える。

横断幕「雅々館FCを『自分たちの』  
クラブに育てよう！」

その下に横断幕「雅々館FCサポーター  
チーム ギャラント・シーズ（G  
T）」。

呼びかけとピラ配りをしている三人と  
GTメンバーたち。

○雅々館FC事務所（昼）

机に座っている館林、ソファに座って  
いる森山と緒方。

館林「緒方君、調子はどうかね？」

緒方「はい、会長。概ね好意的にご協力頂い

ています。選手の方も何人か自発的に。ただ、いくつかのスポンサーさんからは手を引くと言われましたが……」

館林「……残念だが、止むおえんな」

椅子にもたれる館林。

館林「……」

○雅々館FC事務所（十五年後・昼）

配達のトラックが横付けする。

運転手が呼び鈴を鳴らす。

伊藤（43）「はい」

配達員「お荷物です」

伊藤（声）「はい。失礼ですが、どのくらいありますか？」

配達員「結構あります。ダンボール三十箱くらい。どうされますか？」

伊藤、木崎の方を向いて、

伊藤「木崎さん、いつものですけど」

木崎（47）「どのくらいだって？」

伊藤「ダンボール三十箱だそうですが……」。

どうしますか？」

木崎「どうもこうも受け取らない訳にはいかないだろう」

木崎、施設部長の佐倉幹夫（50）の方を向いて、

木崎「佐倉さん、またスタジアムの倉庫に置いていいですか？」

佐倉「ああ、かまわないが……。しかし、言いは何だが、そろそろ別のものでも：

」

伊藤「でもこれ、今の社長が始めたらしくって……」

佐倉「分かった。でも、倉庫が満パンになる前に考えないとな。社長に相談してみる

よ」

伊藤「はい。お願いします」

○動画サイト（全画面）

最初のシーンと同じ動画。

○ 雅々館FC社長室（同）

パソコンでその動画を見ている和正。

動画の下に「十五年前、150万回再

生」の文字。

微笑む和正。

注釈欄に「今年こそ一部へ！」

クリックする和正。

○ 動画サイト（別の動画の全画面）

スタジアム観客席。

中央に黄色のキャプテンマークを付け

た和也。画面いっぱいGTメンバ

ー。

和也「雅々館FCを応援してくれているみな

さん！ サポーターチーム『ギャラント・

シーズ』のリーダー瀬戸和也です！ 今

季はいよいよ一部リーグへの挑戦が始まり

ます！ 念願の昇格を目指して、クラブと

共に戦いましょう！」

後のGTメンバーを見て、

和也「みんな行くぞ！」

全員「おお！」

ドラムに合わせて、手を前に出し、

♪「W e a r e G T！」

手拍子「パパン・パ・パンパン」

を繰り返す。

動画を見て微笑む和正。

和正「……」

○スタジアム（試合・昼）

試合。

ホーム席の後方でGTの旗が、数本振られている。

ホーム席前に「目指せ一部へ！」の横

断幕。

GT応援歌。

♪「おおおお（チャント）」

飛びながら、

♪「雅々館　羽ばたけ　高み目指

して」

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

♪「雅々館　　貫け　　ゴールネット  
を　」

♪「We are GT!」

手拍子「パン・パン・パン」  
を繰り返す。

「ピー・ピー・ピー」と試合終了のホ  
イッスル。

試合終了。2-1で負け。

X　　X　　X

選手たちがホーム側スタンドの前で並  
んで挨拶。

GTメンバー「貴島！　後半のシュートよ  
く止めた！　得失点差でアドバンテージが  
取れたぞ！」

GTメンバー2「小野寺！　あのシュートは  
キーパーが良すぎた！　次はいけるぞ！」  
スタンドに手を振る貴島と小野寺。

○居酒屋「GIZOKU」(同日夕方・外  
観)

○同（店内）

G Tメンバーでほぼ満員。

今日の試合について話をしている。

厨房で料理を作っている鉢巻姿の梶

田。

丸めた横断幕を持った和也と、G Tメ

ンバー5・6が暖簾を潜る。

和也「おじさん、どうも」

梶田「おう、和也か」

客のG Tメンバーたちが和也を見る。

G Tメンバー3「和也も来たのか」

和也「試合が終わったらここって、決まってるだろうが」

梶田「試合、惜しかったらしいな」

和也「ええ。相手も必死でしたから」

G Tメンバー4「今日は負けたけど、最終戦

の条件は引き分け以上で一部昇格。失点を

最小にしてくれたからな。次のFC桐山と

の試合は一番だ」

和也「ああ」

店の壁にかかっている選手のサイン色紙を見るGTメンバー5と6。

壁の中央に、額縁に入っている株券が5つ横に並んでいる。

梶田「和也、そいつらは？　ここは初めてか？」

和也「はい。ウチに入ってくれたので、連れてきました」

店の壁を見回すGTメンバー5と6。

GTメンバー5「和也さん、すごいですね。サインがたくさんあって」

GTメンバー6「あと、株もあるじゃないですか。古いのもあるみたいですけど」

和也「ああ。ここのおじさんは、GTの創立メンバーだからな。最初から全部持っているんだよ」

GTメンバー5「ってことは、伝説のスリィ……」

話を遮る、梶田。

梶田「おい、やめろ。そういうのは恥ずかし

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

いんだよ。和也、お前んとこの親父もそう  
だろうがよ」

和也「いいじゃないですか、おじさん」

梶田「せめて死んでからにしてくれよ。生き  
る伝説みたいな、そんな偉いもんじゃねえ  
よ」

一同、笑い。

テーブルに座る三人。

梶田「全員、生中でいいか？」

和也「はい。お願いします」

飲み食いする三人とG Tメンバーた  
ち。

X

X

X

客が半分くらい帰っている。

和也「おじさん、今日はこの辺で帰ります」

梶田「おう」

梶田、九十度にお辞儀をしながら、

梶田「ありがとうございます！」

それを見る、G Tメンバー5と6。

G Tメンバー5・6「……」

店を出る三人。

○店の前（同・夜）

G Tメンバー5 「和也さん、さっきの大将の人、妙に礼儀正しくなかったですか？」

G Tメンバー6 「僕もそう思いました。あんな強面なのに丁寧というか……」

和也 「ああ、あれか。何か癖になってるって言ってた。詳しいことは教えてくれなくて

な。次は決戦だ。来てくれよな」

G Tメンバー5・6 「はい」

○スタジアム（全景・昼）

満員の観客とG Tメンバー。

聞こえる応援歌。

○スタジアム（同・ロッカールーム）

椅子に座っている選手たち。

その中で、椅子に座って下を向いている貴島（35）と小野寺（33）。

インナー姿の二人。

貴島 M 「今は得失点差で有利だ。前の試合の失点を防いだことが効いている。今日は引き分けでも昇格だ。オレがゴールを割らせなければ行ける」

小野寺 M 「この前の試合でゴールを決めていれば昇格だった。今日の試合は引き分けでいいなんて考えるな。オレのゴールで決めて勝つ。すっとこのチームで頑張ってきたんだ。ここで負けてたまるか」

お互いの顔を見て頷く貴島と小野寺。

ドアを開けて入ってくる監督の古谷勉（43）。

古谷 「よし、みんな聞いてくれ。言わなくても分かっていると思うが、今日は最終節、引き分け以上で念願の一部昇格だ」

古谷を見て、頷く選手たち。

古谷 「そこで、今日の試合は別の人に監督を託そうと思う」

ざわめく選手たち。

古谷「勘違いしないで欲しい。私は逃げていく訳ではない。その人が指揮を取ることが試合に勝つ確率が高いと判断したからだ。もちろん今日の試合の責任は私が取る」

選手たち「……」

貴島「監督、では誰が？」

古谷「会長」

ドアを開けて、ロッカールームに入ってくる背広姿の岡村（60）。

岡村を見る選手たち。

小野寺「会長……」

古谷「今日は岡村会長に指揮をとってもらうことにした」

岡村、ロッカールームの中心まで歩き、

岡村「古谷くんから話があった。最初はびっくりした。もう私もロートルだ。だから一度は断ったよ。しかし、私のメソットの有効性を実戦で示してくれたのは君たちだ。それを最大限発揮できるのは私しかないな」

い、そして今しかない……、と古谷くんから言われた。それで引き受けることにした」

古谷、選手たちを見回して、

古谷「みんな、いいな」

頷く選手たち。

岡村「久しぶりだな……」

岡村、少し微笑んでネクタイを締め直す。

表情がキリッとする岡村。

岡村「今日は……、私が指揮を取る」

○スタジアム（同日・昼）

試合開始のホイッスル。

試合開始。

○観客席（ホーム側）

♪「おおおお（チャント）」

♪「雅々館、はばたけ、頂点めざして」

♪「雅々館、貫け、ゴールネットを」

♪「We are GT!」

手拍子「パン・パ・パン」

応援する瀬戸和也（27）とGTメン

バー・観客たち。

和也のスマホが鳴る

電話を取る和也。

和也「オシだ。二人？ お父さんと男の子

か。杉村さん？ で、どっちだ？ 前？

ああ、案内してくれ」

和也、GTメンバーに向かって、

和也「おい、みんな！ ご新規さん二名、お

父さんと男の子だ。通路開けてくれ！」

GTメンバー「和也、いい加減その言い方

やめろよ」

和也「うるせえ！ そういうところでバイト

してたんだ。気にするな！」

観客の杉村孝（38）と息子の浩人

（10）が通路の階段を降りてくる。

和也「杉村さんですね？」

孝「はい」

和也、席を手で指して、

和也「こちらにどうぞ」

孝「いえ、息子だけお願いします。前で見た

いと言ってる。私は上で見ますので。浩

人、いいか？」

浩人「うん」

孝「では、息子をお願いします」

和也「分かりました。まかせて下さい」

和也、浩人を見て、

浩人「坊や、グッズ持ってるか？」

浩人「…持ってない」

和也、GTメンバーを見回して、

和也「おい！ 誰かタオル持っていないか？」

GTメンバー「持ってるよ。ほら」

タオルを投げるGTメンバー。

和也、受け取って浩人に渡す。

和也「とりあえず、今日はタオルを両手で掴んで、前に出して応援してくれ。チャント

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

はまた覚えてくれればいいから」

浩人「チャントって？」

和也「応援歌みたいなヤツだ」

○スタジアム（フィールド・前半）

（カットバック始め）

FC桐山のポランチがドリブルで雅々  
館陣地に切れ込む。

× × ×

フォワードへパス。

× × ×

貴島、両手を開いて腰を落とし、構え  
る。

× × ×

フォワードがドリブルでペナルティエ  
リアにボールを持ち込んでくる。

× × ×

貴島、フォワードの動きを見ながら、

貴島M「右か？ 左か？」

× × ×

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

フォワードがシュート。

X X X

貴島 M 「右だ！」

貴島、ゴールポスト右隅に横っ飛びで  
パンチング。

X X X

ホームスタンドから安堵の声。

GT 「おおお！」

X X X  
頭を抱えるフォワード。

X X X

GT 「貴島、パパパン、貴島、パパパン」

X X X  
口に手を当てて叫ぶ岡村。

岡村 「横に広がれ！」

岡村、両手で襖を開けるように、

岡村 「早く前線に行け！」

X X X

(カットバック終わり)

貴島、ボールをセットして前線へ蹴り出す。

両方の選手がゲームをリスタートする。

X X X

前半終了のホイッスル。

○ロッカールーム（同）

岡村「よし。前半は上出来だ。貴島、ナイスセーブだった。後半は引き分けでもいいと消極的になるな。だが無理に攻めようとするな。クレバーに動いてゲームを支配するんだ。いいな？」

選手たち「はい！」

岡村「よし、準備してくれ」

ロッカールームから出ていく岡村。

出たのを確認する貴島。

貴島、立ち上がって選手たちを見回しながら、

貴島「みんな」

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

頷く選手たち。

各自のロッカーで後ろ向きにインナーを着替えて、ユニフォームを着る選手たち。

赤いテープのペットボトルを飲んでロッカーに置く選手たち。

○スタジアム（フィールド・後半）

後半のホイッスル。

桐山FCのボールでスタート。

パス回しを始める。

（カットバック始め）

FC桐山のシュートをキャッチする貴島。

× × ×

キックで前線にボールを入れる貴島。

× × ×

ボランチが小野寺にロングパス。

× × ×

パスをトラップする小野寺。

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

× × ×  
ディフェンスを左右に揺さぶってドリ  
ブルで持ち込む小野寺。  
× × ×  
ゴールキーパーの位置を確認する小野  
寺。

小野寺 M 「行ける！」

× × ×  
シュートを放つ小野寺。

× × ×  
キーパーがボールを弾いて、前に落と  
す。

小野寺 M 「まだだ！」

小野寺がスライディングシュート。  
ボールがゴールネットに突き刺さる。

× × ×  
両手をあげて沸く G T メンバーと観客  
たち。

G T 「おおおおおっ！」

旗が振られる。

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

X X X

雅々館FCの控えの選手たちが両手を  
あげて立ち上がる。

岡村、片手でガッツポーズをして、

岡村「よしっ！」

岡村、コーチ陣と手を叩く。

X X X

うつ伏せになって地面を叩くキーパー。  
ー。

(カットバック終わり)

和也、浩人を見て、肩を揺らしなが  
ら、

和也「ゴールだ！ ゴールだよ！ やった  
ぜ！」

小野寺コールが鳴る。

G T「小野寺！ パパパン。小野寺！ パパ  
パン」

(カットバック始め)

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

飛び上がって、両手を広げて吠えながらホーム側のゴール裏の前に向かう小野寺。

X X X

小野寺を追いかけて、頭を叩いて祝福する選手たち。

X X X

小野寺、ユニフォームを脱いで、胸に

「G a i l l a n t T h i e v e s」

と書かれたインナーを指さしてGTにアピールする。

(カットバック終わり)

沸くGTメンバーと観客。

小野寺コールが続く。

浩人、タオルを出したまま、

GT「小野寺！ パパパン。小野寺！ パパ

パン」

X X X

「ピー・ピー・ピー」と終了のホイッ

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

スル。

フィールドに集まって、輪になって喜ぶ雅々館FCの選手たち。

♪「We are GT!」

手拍子「パパン・パ・パンパン」

を繰り返すGTメンバー。

○スタジアム（同・貴賓席）

貴賓席の窓から、試合を見ている和正

（50）。

貴賓室に入ってくる緑川（48）。

緑川「やったな」

和正「ああ」

フィールドを見る、二人。

和正「梶田のヤツは？」

緑川「店があるってよ」

和正「：ったく、大一番だったのに」

緑川「GTの連中が集まってるらしい。チケ

ットが取れなかったんだってさ」

和正「そうか：」

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

フィールドを見る、二人。

和正「始めた時は……、どうなるかと思って  
いたが……」

緑川「……そうだな」

和正「これだけになるまでに、随分頭を下げ  
たもんだ……」

緑川「スリー・グラスホッパーズ（Three  
Grasshoppers）……」

和正「三匹のバッタ野郎……か。誰が付けた  
か知らないが……」

和正、苦笑いしながら、

和正「今じゃ、伝説だと言われてるらしい  
な」

緑川「でも、そのおかげでGTもこれだけ大  
きくなったし、出資も増えた。それがクラ  
ブに認められて、お前は雅々館の社長だ。

息子もGTのリーダーだし。血は争えん  
な」

和正「お前も二代目社長で大口スポンサーの  
ままだろ？」

緑川、苦笑いしながら、

緑川「ボンボンの道楽だって、陰口叩かれてるよ」

和正・緑川「ははは：」

和正「さて、私の役目はこれからが本番だ。

規定に合わせてスタジオムの改修をしない

とな」

緑川「また、増資するのか？」

和正「そういうことになりそうだ」

緑川「買ってもらえそうか？」

和正「分からん。でも、G Tのメンバー以外

でも、以前から地域のみなさんも協力して

くれている。大丈夫だとは思うが：：」

緑川「足りなかったらどうするんだ？」

和正「銀行に頼んでみるよ」

緑川「貸してくれそうか？」

和正「お前のところが保証人になってくれればな」

ばな」

緑川「よせよ。また頭を下げなきゃいけないのか？」

和正「ははは。それは、また後で取締役会を開いて相談だ」

フィールドを見る二人。

和正「とにかく、今日は選手・スタッフ全員で、昇格を祝って乾杯するでしょう」

和正、緑川の方を向いて、

和正「……ミネラルウォーターでな」

緑川、和正の方を向いて、

緑川「……ああ」

フィールドを見る二人。

○フィールド（同）

ホームスタンドに一列に並んで一礼する選手たち。

手を挙げて拍手する選手たち。

♪「We are GT!」

手拍子「パパン・パ・パンパン」

コールの中、タオルを掴んで前に出し、目を見開いて選手たちを見る浩人。

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

浩人「……」

和也、浩人の肩を叩いて、

和也「坊や、また来てくれよな」

浩人「うん」

和也、タオルと掴んで、

和也「今度は、お父さんにおねだりして、こ

ういうも買ってくれ」

頷く浩人。

また選手たちを見る浩人。

浩人「……」

選手たちが戻っていくのを見る浩人。

浩人「……」

浩人を見て、手を振る小野寺とサムズ

アップする貴島。

目を見開いて小野寺を見る浩人。

浩人「……」

♪「We are GT!」

手拍子「パン・パン・パンパン」

コールが続く。

フィクション劇場 第二十九話「サポーター」

( E N D )

( 2 0 2 6 年 6 月 9 日 初 出 )